自然と教育

第8号
1994年12月20日
奈良教育大学
自然環境教育センター

奈良教育大学のシンボル、吉備塚のクヌギの樹叢

目　　次

小林　章：自然と娑婆……2
久保　武治：自然雑感……4
井村　健：校内でのフィールドワーク……5
内田　茂：ツバメの巣の思い出……8
前田喜四雄：コウモリフェスティバル……9
北川　尚史：ホトトギス……11
鳥居　春己：ハクビシンにご注意を……14
梅田甲子郎：赤谷演習林宿舎の思い出……15
前田　浩造：演習林の思い出……17
前田喜四雄：学内環境整備に思う……19
前田　浩造：奈良学芸大学八木分教場の事務職員の写真……21
丸山健一郎：奥吉野実習林の自然観察データマップ……22
北川　尚史：自然環境教育センターの名称……24

自 然 と 娑 婆

小 林　　章

このたび、本学の附属農場および演習林が一括して自然環境教育センターとして正式に制度化され、しかも定員まで認められたことは、まことに御同慶の至りです。

殊に、私は大学院の修士コース設置の際に、文部省の予ねてからの強い方針と、学内の大学院設置委員会の要望もあり、大局的な見地から、農学系の教官ポストを割愛し教育系の教官ポストの充実に当てました。それだけに、その後正規の目的もなく半ば宙に浮いていた農場や演習林が、このたび幼稚園や小・中学校をもつ教員養成大学の本部直属のセンターとして、新しい目的をもち発足したことは、何にも増して有意義なことと信じます。

さて、幼児や青少年の心身の発育にとって自然に接することの重要性については、ここで喋々と辯じるまでもなく、むしろ将来に向かって無限の発展性をもつ奈良教育大学にとって、土地は貴重な財産としてぜひ確保しておかれるようお願いし、私に与えられた執筆依頼の責任の一端を果たしたいと思います。

1．大学における農学部創設時の伝説

【農学部の新設をめぐる賛否両論】　実は旧制の東大および京大に農学部が新設されたとき、時代的には相当なズレがあるが、いずれの場合も既存の他学部からの強い賛否両論が続出した。聞くところでは、反対派の表向きの理由は、農業は技術であって学問ではないというのである。しかし、その裏面には学部の新設のような莫大な新規予算が大蔵省をパスすると、自己の所属学部から提出しているような新規予算はもはやパスしないとの狭量な考えからであった。

これに対し、賛成派の意見はきわめて積極的で、農学は工学や医学などと同じに応用科学である。したがって、わが国の農業がわが国の他産業との間、および他国の農業との間の競争において、引けをとらず発展してゆくためには、ぜひわが国の自然環境条件に叶った研究をする農学部の新設が必要というのである。

ただし、その反面では、その学部との共同利用の大講義室や、定員を含む新分野の講座、あるいは共同研究室の新設を要求し、農学部の新設がパスした暁には、賛成派の学部出身の教官で埋める下心があったというのである。

【農産物の干し場物語り】　京大農学部の創設（1923）にあたって、京都市の寄付により4万6千坪（15ha）の土地が買収された。これは当時の京都大学本部構内の面積とほぼ同じであったが、農学部の将来計画を待たないで、すでにその敷地に大学本部や他の若干の学部は、農学部創設費の一部を流用して、それぞれに関係ある種々の建物や施設をいち早く造った。もちろんこのようなことは、会計法違反で、予算の不当支出となることは、関係者一同の熟知の上であるが、いずれも「農学部用」という隠れ蓑を使ったらしい。たとえば、運動場は名目上では農産物干し場であり、選手合宿所は農夫舎、プールは水田の稲作に対する貯水池であった。

しかし、これらが後日の会計検査で見逃されるはずはない。当然に農学部創設費の不当支出として会計検査員から摘発され、帝国議会（今の国会）の決算委員会に報告された。その結果、当時の総長は予算不当支出の責任者として、監督官庁から譴責処分をうけた。ただし、いずれも関係者個人が私腹を肥やしたのでなく、大学全体としての発展充実を目的としていた。したがって、それらの個々の施設や建物はそのまま利用され、学生スポーツの発展向上に多大の貢献をした。

【附属農場や演習林設置の効用】　農学部の附属施設として農場や演習林の必要なことは説明するまでもないが、その規模はふつうの場合、それを利用する学生定員からみて問題にならぬほど広大な場合が多い。しかしながら、それが長い年月の間には他学部の新学科建設の用地や、農学部との共同利用の研究所の建設用地として利用され、どんどんと面積

的に減少してゆく。

そこである日、私は農学部創設当初からの古参で旧制高校の大先輩に、その理由を尋ねた。その時、老教授は微笑しながら「実は、欧州たとえばドイツなどでは、大学を創立する場合に、とり敢えず必要な用地の他に相当に余分な土地を農場予定地として買収し、財産として保留しておく。そして、大学の発展するに伴い、その一部を新しく造る建物の用地や資金源にした。なんと言っても土地は値上がりこそするが、余程のことがないと値下がりしない」と説明し、「京大の農場も大阪府の高槻にある分を入れると、まだまだ相当な面積になるね」とのことであった。

附属農場だけでなく、附属演習林をもつことの余得として、こんな記録も残っている。もっとも、これは帝国大学と称した戦前のことで、定年退職する名誉教授に対し、京都大学では金一封（1万円、ちなみに助手の初任給は70円）がおくられたのである。

この金額で当時は余生を送るにふさわしい立派な住居が建ち、しかも相当な小遣い銭が残ったはずといわれている。そこで驚くことには、この金額の出所は、主として農学部附属の樺太演習林からの売り上げ収入によったとのことである。当時の同演習林は実測3万haの大面積を占め、一抱えもある大きさのエゾマツ・トドマツが林立する原始林であった。

そこで、この資源の処分は、飽くまで施業案に基づいて行われたもので、王子製紙株式会社と年期契約を結び、一定の大きさから上の木を毎年売り払うことになっていた。その場合の収入は毎年25万円以上（今日の評価1億円以上）になり、特別会計であったので、残った金を大学で貯金しておいて有用な使途に当てたというのである。

しかし、この京大にのみ許されたドル箱いわば恩典を誰もが黙視するはずはない。やがて代議士達が目をつけ、国有財産整理委員会が設けられ、大半を大蔵省へとりあげるべきとの意見が出て、当時の紙上を賑わしたらしい。これに対し、大学側は会社との年期契約、および特別会計の実態、農学部の試験研究の範囲および成果などを示し、結局3万町歩（ha）の演習林面積は必要であり、その他の事柄に対してもそのままの状態が続いた。

ただし、戦時体制中のことは不明であり、敗戦以後の旧制大学における多くの恩恵は帝国の看板とともに消え去ったことは言うまでもない。殊に、その恩恵に最も浴すべき農学部新設当初の教授は、その就任がいずれも30～35才の新進気鋭時代の抜擢であったから、その定年退職期はすべて戦後となりまことに残念である。

2．自然環境教育センターとは

【教員養成大学の施設としての意義】　附属農場および演習林は、農業および林業についての学生実習の場であり、また教官がそれらの産業の発展のために必要な自然科学的または経営経済学的な実験をする場である。したがって、主に農学部におかれるべき附属施設である。

これに対し、自然環境教育センターとなると、その具体的成果を何に求めるかは別として、むしろ具体的に如何に活用すべきかのむつかしさがある。

ただし、発育盛りの幼児および青少年の心身の健全な成長にとって、自然環境に接することの重要性については、すでに日常生活の経験から万人の認めるところである。それだけに、教員養成大学にとっては、附属農場および附属演習林よりも、自然環境教育センターとしての発足が、教職員にとっても、学生および附属の幼稚園の幼児、小中学校の生徒にとっても、より本質的なそして合意合目的な施設である。

その意味では、自然環境教育センターにおける具体的成果を何に求めるかは、たとえ同じ施設が名称を変えたものであっても、その利用方法や規模の変化により当然に異なる。とくに、附属農場や附属演習林の場合には、対象が農作物や畜産物、木材の生産であったのに対し、今後は自然環境を通しての人間教育である、と思われる。

【無農薬栽培は真にあり得るか】　先に私は、自然環境教育センターの具体的成果を何に求めるかは別として、むしろ現在の自然環境の保全を具体的に如何にして維持するか、すなわち健全な自然環境をあくまで保持し人間教育の場として活用することがむつかしいと述べた。ということは、「自然環境とは何か、さらには自然環境教育とは何か」を実際に説明することは実にむつかしい。

たとえば、最近は無農薬栽培が大流行であり、その生産物は確かに安心であり、また美味しい。しかし、私に言わせれば、現在行われている無農薬栽培

が果たして真の意味での無農薬栽培かどうかは疑問である。というのは、現在の無農薬栽培を行っている農家は、全体の農家のごく一部であって、それを%で示し得るほどの広さのものでは決してない。

したがって、無農薬栽培だと称しても、実際は周囲の殆どの農家が薬剤散布をしておればこそ、この温暖多湿のわが国で無農薬栽培を標榜してゆけることを無視してはならない。

この点については、農家出身ではない私が農学部を卒業して、実際に兵庫県の農事試験場に赴任して、わずか1ha前後の果樹園に対し、毎日を薬剤散布と雑草管理に、他の同僚3名とともに、貴重な4か年を空費した経験や、その後の大学の附属農場で多年にわたり観察した偽りない事実である。

その意味において、理想的な自然環境教育の場を如何にして今後も維持するかは、無農薬栽培と同じ関係者に与えられた最も重要な課題である。すなわち、たとえ名称は変わっていても、実際は前の附属農場や演習林のままでの規模や内容では真の意味での自然環境の保全は不可能であり、また貴重な財産としての土地の確保も困難である（1994年10月）。

（元学長・名誉教授）

自然雑感

久保武治

10月中旬の今頃、奈良の街の何処を歩いていても、木犀の仄かな香りが漂ってくる。原因の木はいずこにありやと見渡すと、黄色い花をビッシリつけたキンモクセイが目につく。しかし思い出すと、2週間前にも少し香りはゆるやかだったが、既に同じ匂いを嗅いでいる。その主はギンモクセイである。白い花の付きはキンモクセイに比べて疎であるが、香りはより上品なように思われる。これら木犀の花付きが例年に比べて良かったのは、今年の少雨と関係があるのかも知れない。木犀のこの優雅な香りをかぐと秋を感じさせられる。秋の風物も色々あるが、中でも百舌のチー、チーという高鳴きが聞えてくれば最高である。

今年の夏は、近来稀にみる猛暑であった。その上に雨も少なく、各地で水不足が叫ばれた。お蔭で、公園や街路に植えられた木々にも立枯れが目立つ。古い木でも根付きの浅いものは軒並みに赤茶けている。五月や平戸のつつじ類や、馬酔木が特に弱い。貝塚イブキ、チャボヒバや高野槙も弱い。地を這う雑草類も無残に枯れている。欅、楢や桜などは自衛的に落葉するか又は葉の周囲を茶色に縮れさせて中央の一部を申分け程度に緑を残している。今頃になって息を吹き返したのか、新芽を出し生気をとり戻している。人も大変だったが植物の世界でも、暑さの影響は深刻だったようである。

一度完全に水気が無くなった土地に水を撒いても、耕されてなく自然に固まっている場合には、中々水気を受付けない。地面には滲み込まず、表面を流れていく。試しに地面を掘って見ると、ほんの5mm位湿っているだけで、その下はカラカラに乾いている。恰もメリケン粉の上に水を撒いたように、水が弾かれている。水が滲透していく為には、（表面張力で水玉になって弾かれないように）素地にも予め適度の湿りが必要である。久し振りに降る待ち望んだ降雨も、急にザーッとくる短時間の夕立ちではダメで、相当長時間、シトシトとゆっくり降ってくれる必要がある。

私達日本人は四季の変化に恵まれ、温暖な天候のお蔭で豊かな植生に囲まれている。更地を放っておくと、すぐ雑草が生え、多彩な草木が覆いつくす。弊害のようにみえるが、これが豊かな植生が成り立つ出発点でもある。数年すれば藪のようになり、10年も経てば木も育つようになる。奈良の、近くの里山に分け入れば、本当に色々な木々が育っている。主として広葉樹であるが、専門家でないので一つ一つの名前がわからない。それに比べるとヨーロッパでは日常見かける草木の種類が貧弱であるように思える。私が10年程前に見たドイツでは、庭に木を植えても成長が遅く、雑草も育ちにくいので、草引きは必要でなく、熊手の大きいようなもので、表土を

掻くだけで良い。森といっても殆んどが人工林で樹種も限られている。自然の森は近代に移行する折に燃料や建材に使われ尽して、特殊な例を除いて残っていない。（大型の石造建築物には木材はあまり使われていないようにみえるが、造成時には構造の保持に膨大な量の木材、特に巨木が消費されたそうである。）近代化が進んだ所程、近在の森の破壊も進んだ。その上に悪いことには、植生の回復力はアジアに比べて格段に劣るのである。その原因の一つは、その地がアジアに比べて高緯度に位置することである。ロンドン、パリ、フランクフルトと同緯度の土地は、アジアで何処に当るかとみると、樺太になる。海流等の影響で寒さは少し緩和されてはいるが、1年を通じての日照時間、気温、雨量などが日本に比べると大きく異なる。従って植物がヨーロッパで育つ為には、この過酷な自然条件に打ち克つ必要がある。

そもそも植物は自然の中で、それに逆らわず、順応しながら、無言に生き続けている。日照りが続けば、葉を落とし、風が吹けば枝を折られるが、しかし後日再び芽を出し若枝をつける。何の不平も言わず、他の生物に迷惑もかけずに、力強く生きている。それに引換え人間はどうであろうか。彼は他の生物からの恩恵を受けなければ（悪く言えば、彼等の自然の営みに干渉しなければ）生きては行けない。人間以外の、植物を含む生物一般は、自然の輪廻の大原則を無意識ながらも弁えて、己の枠組の中で慎しく生きているのに、人間だけが、その枠組を越えて、生物・無生物より成り立つ自然に対して、最大の〝わるさ〟（関西弁の悪戯の意）をし続けている。

人類は、昔人口が少なかった時に存在していた平和な自然の輪廻を、今に到るまで阻害し続けてきた。将来もそうしなければ生きて行けない悲しき運命にある。そう出来たことを頭脳ある人類の勝利としてきたが、これからはそうは言ってはおられない。その持てる性向を捨て去ることができないのなら、せめて、今迄使ってきた頭の回転の速さを〝落す〟か、少し〝逆回し〟にする必要があるのではないか。私達は身近な所から、可能な努力をしながら、残されている美しい自然を慈しんで行かねばならないと思う今頃である。　（物理学教室）

校内でのフィールドワーク

井村　健

1．自然教育としてのビオトープづくり

本校では、理科や自然史里山研究部、科学部などが中心になって「裏山の里山化活動」をはじめ、「学校園の一坪五殻園」「ビオトープ（生物生息空間）としての学校園づくり」など環境教育につながるさまざまな活動を行ってきている。

「裏山の里山化活動」については、人見教諭が、本校研究集録第23集（1992）「本校裏山の里山化構想とその教材化」で詳しく報告されている。「学校園の一坪五殻園」は、中庭をはじめ校内のさまざまな場所を利用している。中庭には樹木や草花はもちろんであるが、その一部を利用して開墾した畑（現在は校内に5箇所）にさまざまな野菜やソバ、ワタ、ムギ、アイなどを毎年栽培している。また、同じ中庭の一角にビニルシートを利用して田圃の土を入れたミニ水田をつくり、大学附属農場（現在の奈良実習園）から頂いた赤米（種子島、対馬産）を植えている。さらに、中庭の植物に集まってくる蝶や蛾の種類を調べ、標本作りを行っている。

今年の5月には、1年生の男子生徒が「この苗を学校で使ってください。」と言って、トマト、ナス、キュウリ、ピーマンなどのポット苗を全部で20鉢持ってきてくれた。話を聞くと彼の祖父が農業で野菜を作っているとのことである。ナスだけは10月になっても大きく成長して秋ナスを賞味させてもらっている。

「ビオトープ（生物生息空間）としての学校園づくり」として、本年度は特に水域としての学校園作りに重点を置いて活動を行ってきた。例えば、校内のどこかに水の湧くところがあれば、そこから水を

引き（流水域）、それを溜まりの池（止水域）にすることができるが、残念ながら本校にはそのような条件が整っていない。そこで、手始めに空き地にビニルシートを使った池を昨年作った。今年は2つ目の池を作り、それらを細い水路でつなぐことにした。しかし、そのままでは流水にはならないので、今年の夏ソーラーパネルを設置して、水路の水循環用ポンプでいろいろ試している。うまくいけば、この流水路が水生昆虫のビオトープになる。また、このポンプを使って噴水をつくることなども試している。

2．本校裏山の小哺乳類

学校にある約5,000㎡の裏山に「エンカウンタースペース」づくりを行いアカネズミとタヌキの観察を行ってきた。

まず、1992年秋に裏山に本校の人見教諭の指導のもとで「自然観察小屋」を製作した。裏山の自然環境（微気象）の測定のため、科学部員が三谷教諭の指導で自作の百葉箱を設置し、その中に小型の自記温湿度計を置いて観測を行ってきた。

この年、11月の教育研究会の折に前田先生が本校の裏山へ登られて「ノネズミの巣穴（トンネル）があるのでノネズミが棲んでいる可能性が高い。」と話しておられた。その後、1993年2月に入ってから人見教諭がダンボール箱にネズミを導く管をつないだ装置を置いた。数日の観察の結果、アカネズミがやってくることが分かったのでアクリル製の古い水槽（一昨年、シマヘビを飼育していたもの）に置き換えて「アポデムスボックス」として設置した。以下、観察の記録を科学部報「アポデムス」から引用して紹介する。

第1回アカネズミ観察会（2／12）

科学部の活動の事前調査として、裏山のアカネズミの行動を記録することになりビデオ撮影を行った。2カンデラの電灯を燈し7時頃から10時前まで約3時間撮影を続けた。しかし、アカネズミは非常に用心深く、7時18分と9時30分ごろにちょこっと顔を出しただけで、餌を食べにアクアリウムの中に入って来なかった。

第2回観察会（2／26）

科学部ではじめての、アカネズミ観察会が、期末テストが終了した日、午後6時から8時頃まで行われた。科学部としては1回目のこの日、3人の部員と6時頃から観察を始めた。

しかし、思ったより警戒心の強いアカネズミは、なかなか姿を見せなかった。ビデオの方は8時以降も撮影を続けていたのだが、今回も偶然にもビデオのバッテリーが切れる寸前の8時20分ごろに、下のようなアカネズミが写っていた。

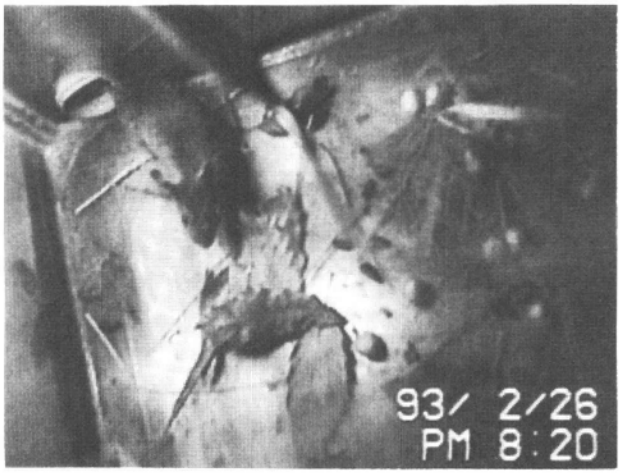


写真1　アカネズミ(1993.2.26)

今回は、警戒しながらもちゃんとエサ（ピーナッツの殻つき）を1個口にくわえて、すばやくトンネルに入っていった。（この間約20秒）生物の生態観察は、忍耐と根気と集中力である。この寒い時期慣れない観察では、不用意に音を立てたり、話をしたりでなかなか集中できなかった。今後は生態の記録（主にビデオ）に重点を置いた活動を中心に行うほうが、アカネズミの行動が少しでもわかるのではないかと考えている。1週間後の昼休み、3年の科学部員が以前に技術の作品で作ったガラス張りの細長い箱を使って2つめの観察箱を作ることになり、パイプをつないでさっそく裏山へ設置した。

第3回観察会（3／4）

夕方から第3回目の観察会のための機材の準備を、2年の科学部長の田仲君に手伝ってもらった。前回はビデオの電源に苦労したので今度はＡＣ100Ｖを用いた。観察のたびにＡＣリールを引くのは大変なので、良い方法を考える必要がある。

部員6人と共に裏山へあがった。今回は聴診器を持っていって、巣穴につながっているホースにあてた。これは、ネズミの動く音が聞こえないだろうかと考えたのだ。4人がそれぞれ順番に聴診器をあてて聞いたが、いずれも歩くようなガサガサする音が聞こえたと言っている。しかし、みんなが観察して

いる2時間程の間には、ついに姿を見せなかった。私も聴診器をホースにあてて15分ほどじっとした。ホースからは、かすかにイヌの鳴き声や自動車の走り去る音くらいしか聞こえなかった。しかし、シーンとした中で息をこらしていると、ネイチャーゲームの「サウンドマップ」や「音いくつ」というゲームをしているように感じた。夕方6時ごろから連続してビデオ撮影をし、みんなが帰ってからもビデオは回っていた。やはり、アカネズミは現われた。9時58分には殻つきピーナッツを1個運び出す。この間約5秒。10時11分に再び現われてヒマワリの種の皮をむいて実を食べて帰ったか、皮をむいてからそれを運び出したか。この間約15秒。1回目に現われてから2回目に現われるまでの間約12分。今回は初めて顔を出すのがこれまでよりも遅かったが、人見教諭は「気温の関係じゃないかな。」と話されていた。

3．裏山のタヌキ

これまでにも、何人かの生徒が裏山や附中周辺でタヌキを見かけたという情報を理科室に寄せてきていた。私も、植村佳央教諭と昨年9月中旬の朝、裏山西側斜面（駐車場）の溝の中をタヌキが走り去るのをはじめて見た。

ちょうどその頃から、人見教諭が裏山の観察小屋に時々食パンを置いて、タヌキがそれを食べないか調査しておられた。その結果、2、3日に一度はその餌を食べにやってきていることがわかってきた。野犬ではないかとも思われるので、タヌキが住みついている証拠である「ため糞」（タヌキのトイレ）の調査を行うことにした。「ため糞調査隊」が作られ生徒への参加を呼びかけた。

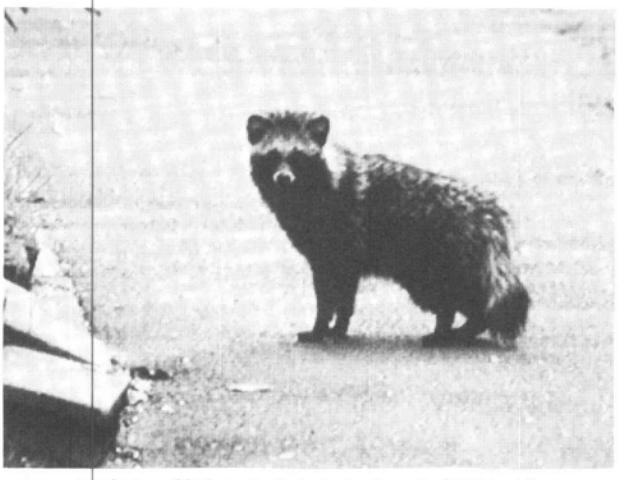


写真2　校内にあらわれたタヌキ(1994.4)

第1回目の「ため糞調査」に先立ち裏山のタヌキのビデオ撮影を行った。夕方、ACケーブルとポータブルビデオを準備して夜7時から翌日の午前3時まで8時間の撮影を行った。餌はいつもの食パンを細かくちぎったものと、昼食の残りの、ごはんなどを観察小屋の中の台に置いた。翌日の朝、観察小屋に行ってみると、餌がきれいになくなっていた。ビデオにタヌキが写っていることを期待して調べてみると、撮影を始めて40分後の7時43分に早くも小屋にやってきた。その後、タヌキの行動が合計21回ビデオに記録された。

写真3　ため糞(1994.2.19)

昨年11月6日（土）に第1回目のタヌキの「ため糞調査」活動を始めたときに、噛みあとがたくさんついたマヨネーズの空容器が合計5個見つかった。これについて人見教諭は「マヨネーズ容器の中に残っていた中身を食べるために、近くのごみ箱などから引っぱってきたものではないか。」と話されている。人見教諭の提案で、生徒に呼びかけて集めた、たくさんの空容器に番号を書いて裏山の観察小屋に置くことにした。これまで、数回に分けて置いた結果、翌日（遅いときでも数日後）にはその容器がなくなっていた。2回目のため糞調査からは、このようにタヌキが引いたマヨネーズ容器の分布調査を中心に行った。これまで行った計5回の「ため糞調査」活動の成果については、本校の自然誌里山研究部会誌「平城山」に報告されてる。

今年、2月19日（土）に行った3回目の調査には2年生の女子二人の参加があり、午後1時30分頃から裏山に入った。佐保田第1池と第2池の間の堤防を通って、八幡神社裏の竹藪へ入っていった。なかなか、マヨネーズの容器が見つからなかった。しか

し、そのかわり木の根元にたくさんの野鳥の羽根を発見し、奈良高校北側の竹藪の土手でクチベニタケを採集した。以前にタヌキのため糞が見つかったところへ行ったところ、前回に比べてため糞の量が増えており、しかもかなり新しい緑がかった色の糞も混じっていた。これは、裏山のタヌキが続けてここを利用していることを示している。

1回目、2回目の調査地点を回ってみたが、残念なことにマヨネーズの容器は1つも見つからなかったが、この日活動に参加した二人は、「のんびりと、山の中を歩くのは楽しかった。いろいろ変わった物を見つけることができて面白かった。」と言っていた。

今年もそろそろ調査を開始する時期がやって来たので、科学部員と一般参加者に「探索隊員募集」の呼びかけを始める予定である。　（附属中学校）

ツバメの巣の思い出

内田　茂

私は学生時代、兵庫県宝塚市に住んでいたことがある。その時の住居は私の両親が管理していたある会社の社員寮の一隅であった。その建物は元々個人の邸宅で、庭も広く、玄関に続く廊下もゆったりしたものであった。

ある年の春、その廊下の電灯の傘にツバメが巣を作り始めたのである。たまたま開けてあった玄関から入って来たのであろう。軒下に作る巣はよく見かけるが、屋内の、しかも入口から数メートルも中に入った所で野鳥が巣作りをするなんて私は聞いたこともなかったし、これは縁起がいいことだと母が言ったこともあって、我々は協力することにした。協力と言ってももちろん巣作りそのものを手伝うわけではない。泥などの建築材料をせっせと運ぶ作業がはかどるように、昼間はずっと玄関の戸を半分開けておくことにしたというだけのことである。夕方はできるだけおそく閉め、朝はできるだけ早く開けてやった。それはたいてい母の役目だったが、朝早く戸が開くのを待ち兼ねて土間の上を二羽のツバメが旋回しているのを私もよく見たものである。それに、電灯の熱が営巣、産卵、育雛には有害に違いないと思って、明りは決してつけないことにした。

巣がほぼ出来上った時、私は踏台に乗って手を伸ばし、そっと巣に触ってみた。実に頑丈に作られていた。少々の力で崩れるものとは思えない。粘土質の泥とツバメの唾液であんな風に出来るのだと聞いたことがあるが、それにしても何という立派な住居であろうか。これがまず一つの驚きであった。

それから何日かたって、卵を生んだらしい気配が感じられたので、私は巣の中をのぞいてみたい好奇心に駆られた。しかし巣と天井との間は数センチしかなく、直接見ることはできない。そこで又踏台に乗り、天井に鏡を当てがって懐中電灯の光を反射させて巣の中を照らしてみた。その時鏡に映った巣の中の様子と、そこから得た一種の感動とも言うべき思いを私は忘れることができない。既に2個の卵が生み落されていたが、驚いたことに、かわいい卵の下にはそれぞれ柔らかそうな羽毛が敷かれていたのである。

動物の行動について私は全く専門外の人間だから、卵の下に羽布団を敷く親鳥の行為は単なる本能的な習性なのか、あるいはツバメなりの知恵がそこに働いているのか、よく分らない。その後ツバメの巣の中を見たことは一度もないから、ツバメがすべてあんな風にして卵を生むのかどうか、もしかすると鳥類全般について言えることなのかもしれないと思ったりもするが、それも私には分らない。卵は、あたかも人間が手で置いてやったかのように、二つともちゃんと羽毛の上にあったから、偶然そこに落ちたとはとても思えなかった。小さな生命の誕生にかける親鳥の期待を見る思いがした。

動物学の専門家なら私のように知らない、分らないではすまされないところだが、素人なりに私もツバメの産卵について考えてみた。あれはやはり種族保存のために卵を大事にしようとする知恵の現れに違いないと思いたい。あんな小さな動物でさえ、そ

ういう知力を発揮して懸命に生きるのか。きわめて小さな出来事だが、自然界の神秘と言って片づけてしまうには、私の受けた印象はあまりにも強かった。

私は今でも毎年ツバメが巣作りを始める季節になると、もう四十年ぐらいも前に、鏡を介して見たあの巣の中の光景を鮮やかに思い出し、驚きと感動を新たにするのである。　（フランス語教室）

コウモリフェスティバル

前田　喜四雄

「野鳥の会、探鳥会、巣箱」などという言葉を誰もが知るようになってすでにどのくらいたつのだろう。また、「鳥は虫を食べてくれるので、人の役にたつ動物である。」ということはみんなが心得ている。

これに対して、コウモリについては「コウモリって暗い洞穴に住み、得体の知れない気持ちが悪い動物である。」くらいに思われているのならまだよい方である。多くの場合、「血を吸って人や動物を死に至らしめる恐ろしい動物である。」とほとんどの人が信じているから始末が悪い。さらに、コウモリは日本産陸上哺乳動物約百種のうち、31種とほぼ3分の1を占め、日本産の哺乳動物の中でもっとも種類の多いグループであるということについては一般の動物学者でさえ知らない。

さて、本当のコウモリとはどんな動物か？大多数のコウモリは夜に飛んでいる虫類を捕って餌にする。しかも、その量は大変に多い。例えば、体重が6～7グラムと小型のコウモリでも、蚊ぐらいの大きさの虫だと一晩に400～500匹も食べる。コウモリは通常群れで生活する。しかも、毎晩このように大量の虫を捕る。したがって、一群れでもいると、その地域の昆虫類個体数はかなりの影響を受けることになる。

すなわち、鳥は昼に、一方コウモリは夜に虫を食べてその個体数を調節するのである。それなのに、なぜ鳥は好ましく思われ、コウモリは悪者になっているのであろうか。

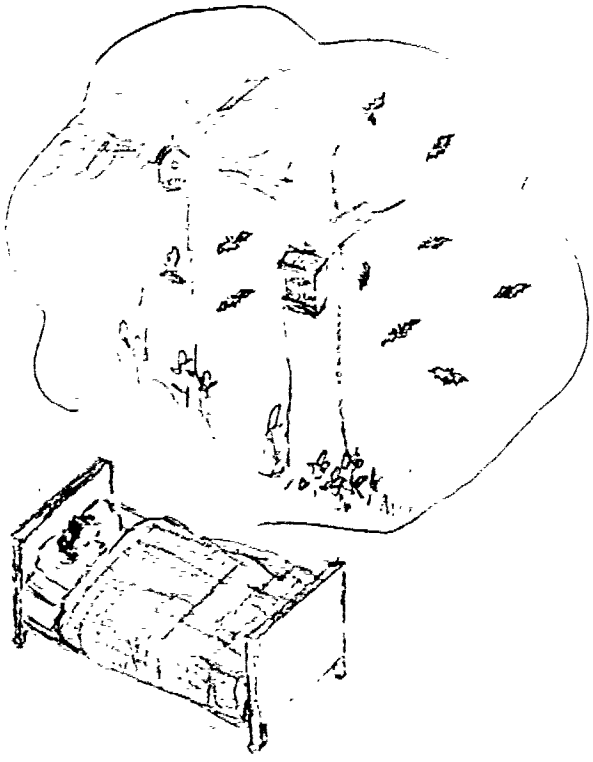
これには、コウモリが人や動物を襲って、かんだり、血を吸って動物や人を殺害すると思われていることに関係があろう。そこで、これに関する誤解を解こう。まず、血吸いコウモリ、いわゆるバンパイアバットといわれるコウモリは、確かに世界には3種生息する。しかし、これがいるのはアフリカや東南アジアではなく、中南米の熱帯・亜熱帯地域だけである。映画や小説では、東南アジアや地中海地方の洞穴に血を吸うコウモリが登場するが、全くのウソである。

また、血を吸うというのも、何か牙かストローのようなものを動物の体に刺して、血をチュウチュウ吸い取るというイメージがあり、非常に誤解を生みやすい。小説では血を吸われたことによって動物や人が干からびて死んでしまうことになっているが、まったくの誤解である。このコウモリは動物の毛のない、あるいは少ないところにそっと止り、鋭い歯で少しだけ皮膚に傷をつける。そうすると、血がにじみだしてくる。コウモリの唾液に血液の凝固を阻害する成分が含まれているので、血は固まらない。そのにじみだしてくる血液をコウモリはなめて栄養にするのである。もしコウモリが体に取りついているということを動物が知ったら、動物はコウモリを尾ではたいたり、木に擦りつけたり、あるいは振り落してしまう。だから、動物に気がつかれないようにそっとことを進めるのである。

考えようによっては、カやヒルと同じ、あるいはそれよりも大したことがなく、どうということはないように思われる。しかし、なぜかこのことが変なぐあいに誇張歪曲されて伝わっている。ただ、本当に恐ろしいこともある。カが日本脳炎を媒介するのと同じで、コウモリが現地の脳炎などの伝染病を媒介することである。

5年前に乗鞍高原で、日本ではまだ数か所からしか知られていないクビワコウモリという日本固有の希少なコウモリが見つかった。それは本来樹洞（木

にあいている穴）を昼間の隠れ家にしているコウモリである。しかし、最近の大木の消失による樹洞不足から共済組合の保養宿泊施設の壁面の下をねぐらにし、そこで出産し子育てを行っているものであった。このコウモリは5月にどこからともなく、集まってきて、7月に出産し、8月の末にはまたどこかへ姿を消すのである。ここがこのコウモリの唯一の知られている繁殖場所ということがわかった。ところがこの施設を管理している大学はコウモリがここに住み着いているのを好ましく思わず、コウモリのねぐらがある壁面をコウモリがいなくなった秋に改修することにした。



これは一大事だということで、コウモリが住み着いていた場所の壁板をもらい受け、それで大型の人工コウモリ用巣箱を作製し、付近に仕掛けた。しかし、翌年の初夏にやってきたコウモリはこの巣箱を利用せず、一部はこの施設の別の壁面の下に住み着き、残りは別の民家の宿泊施設を利用するようになった。共済組合の宿泊施設を管理する大学ではさらに新しく住み着いた場所も改修してしまい、翌年からはついにそこには住み着く場所を失ってしまった。

この間、我われもじっと手をこまねいていたわけではない。全く知られていないクビワコウモリの生態調査を進める一方、その大学当局とコウモリ保護について話を重ねたが、コウモリが宿泊施設に住み着いていること自体が間違っているという考えなのである。もし、これが貴重な鳥だったらどうなのであろうか。おそらく一般市民の反応も異なり、また強力な応援などがあり、おそらくもっと別の扱いになったのではないだろうかと、コウモリの自然界における役目の大事さに気がついている我われは寂しく思わざるを得ない。

一方、幸いなことに民間の宿泊施設の責任者の方はコウモリに理解を示し、今のところコウモリの繁殖が脅かされてはいない。しかし、もしこの施設の微小な環境が変ってコウモリが住むのに相応しくなくなったら、また老巧化して建て直しということになったら、このコウモリは新たに繁殖場所を見つけることができるのだろうかということを考えると安心できない。

やはり、回り道ではあるが、コウモリはどういう動物か、本当の姿を、一般の市民、子どもたちにもっともっと広く知ってもらうしかない。コウモリについて、せめて鳥なみの知識をみんなが持って欲しい。もしそうなれば、コウモリが住み着くと喜んでもらえる、また、コウモリに住み着いてもらうために積

極的にコウモリ用のアパートを作ったり、巣箱を仕掛ける等の保護策を進んで行ってもらえるようになるのではないだろうか。コウモリが生息していることこそ、生態系が正常に保たれている証拠であり、自然が残っていることを示すので、コウモリを身近な自然や林に呼び戻そうという運動がヨーロッパで行われている。しかし、日本ではコウモリの生態系に果たす役割についてはほとんどの人が気がついていない。

そのような主旨で、1994年は現地、乗鞍高原で環境庁のビジターセンターを利用させていただいてのコウモリについての講演会とそれに引続いて、付近のコウモリ観察会を2回行った。現地へ来ていた観光客の参加者は決して多くはなかったが、いずれの感想も悪くはなく、しかもコウモリについての意識がまったく変ったものと思われた。

この講演会と観察会の宣伝は、長野県乗鞍高原ビジターセンターでのポスターだけであった。したがって、もしこれを全国的に宣伝したら、多数の人が集まってくるのではないだろうか。幸いコウモリは変り者、怖いもの見たさという変な人を引きつけるものがある。それを利用しない手はない。

ただ、コウモリについての講演会と観察会だけではあまり人を引きつける魅力がない、いっそコウモリについて、またコウモリにまつわるいろいろな催しを多面的に行おう。名付けて「コウモリフェスティバル－コウモリにもせめて鳥なみの市民権を！」。1995年8月5～6日には全国から多数の人を集めコウモリに埋めつくされた2日間を乗鞍高原で展開しようではありませんか？（自然環境教育センター）

ホトトギス

北川尚史

この春、京都府相楽郡笠置町の草深いところに、ささやかな家を建てた。車の運転ができないので、この家からの通勤は難しく、週末に行って、のんびりと休日を過ごしている。付近を散歩したり、動植物を観察したり、畑仕事をしたり、本を読んだりしている。最近は研究に対する熱意を失い、特に顕微鏡を見るのが苦痛になった。いささか、うとましくなってきた研究から解放されて、笠置の家では、気ままな生活を送っている。植物学の専門書は読まない。昼寝をする。朝酒を飲む。朝風呂に入ることもある。まことに堕落した生活である。

今夏は記録的な猛暑の日々が続いた。笠置は奈良ほどではないが、昼間はすごい暑さであり、身の置き所がないといった状態であった。わが家にはクーラーがない。クーラーはおろか、扇風機さえない。扇風機はおろか、窓にカーテンさえもない。午後は窓から強い日差しが射し込み、ひどく暑い。そのため、ゴザと枕を持って家の中を歩き回って、日差しを避け、涼しいところを探して寝ころび本を読む。本を読んでいると眠たくなり、しばしば、うたた寝をする。たいていは、玄関から廊下にかけてが風の通り道で、いちばん涼しいので、そこで寝ころぶ。他人が入ってくれば、玄関の上がり口で寝ているのでびっくりするであろうが、めったに人は来ない。

秋になっても、まだ日差しが強い。いま、この文章を書いている9月の中旬にはヒガンバナやヨメナが咲き始め、朝夕はめっきり涼しくなったが、昼間はまだ暑い。なんだかチリチリするような日差しが照りつけている。芭蕉の「あかあかと日はつれなくも秋の風」は、このような状況をよんだものであろう。カーテンのない部屋では、初秋の日差しは、たしかに、あかあかとして、なんともつれない感じであり、冷房のきいた快適な生活ではかなえられない芭蕉の詩心を共有することができる。芭蕉の言いたいことが痛いほどよく分かるのである。

笠置の家は自然に恵まれていることだけが取り柄である。昼間、窓を開けていると、いろいろな虫が入りこんでくる。庭にはカエルやトカゲやヘビがいる。窓の下を流れる白砂川のせせらぎが聞こえてくる。ウグイス、キジバト、カケス、キジ、コジュケイなど、さまざまな鳥が鳴く。特に春の早朝には、わが家の周りは、私の知らない小鳥たちのさえずり

で溢れているような印象であった。夜には家の前の林でフクロウが鳴く。そして、ひょっとしたら聞けるかもしれないと期待していたホトトギスの鳴き声を聞いた。

5月は周囲の山の新緑が目にしみるように鮮やかである。今年、ホトトギスの鳴き声は5月22日にはじめて聞き、8月7日まで笠置へ行くたびに聞いた。「てっぺんかけたか」とか「特許許可局」とかと聞きなす、その特徴的な声が、わが家の周囲の山から聞こえてくる。すぐ近くの林の中で鳴くこともある。付近にはウツギがたくさん生えているが、5月下旬から、その花（卯の花）が咲いた。6月には、夜になると、家の前の白砂川にたくさんのゲンジボタルが飛びかい、その光の点滅がゆらゆらと窓際まで近づいてくる。田舎の初夏を演出する小道具が揃っているのである。

「夏は来ぬ」という歌がある。一番の歌詞は「卯の花の匂ふ垣根に時鳥（ほととぎす）はやも来鳴きて忍音もらす夏は来ぬ」である。佐佐木信綱が作詩したこの歌は、明治時代から小学唱歌として親しまれているので年配の人は誰でも知っている。

笠置でウツギの花やホトトギスの鳴き声に接して週末を過ごし、この歌詞の情景描写がいかにも不自然であることに気づいた。まず、ウツギの花にはほとんど香りがない。小さな白い花が群がって咲き、視覚的によく目だつが、鼻を近づけても、匂いがほとんどない。嗅覚の鋭敏な人にとっては少しは匂うかもしれないが、詩によむほどのはっきりした香りがあるとは思えない。

また、ホトトギズは森林に生息する鳥であり、ウツギの垣根にやってくるとは考えられない。「垣根に」の「に」は場所を示す助詞ではないと主張することは可能であろう。しかし、作者は忍び音が聞こえるほどの近さからホトトギスの声を聞いているのだから、やはり近くの垣根にホトトギスがやって来て鳴いているという設定で、この詩をつくったにちがいないが、そんなことはあり得ないと思う。ホトトギスは人家の庭先に来ることはなく、その鳴き声もめったに聞くことができない。開発が進んだ現代だから、ホトトギスの声を聞く機会が少ないのではなく、後に述べるように、昔からそうであった。なお、市街地でも、上空を飛びながら鳴くことはあり、私は高畑町のわが家でホトトギスの鳴き声を聞いたことがある。

「忍音もらす」も変である。忍び音は古典に出てくる言葉で、なぜかホトトギスに対して用いられるが、この鳥にはふさわしくない。「忍び音もらす」は「鳴かないでおこうとしたのに、つい小声で鳴いてしまった」という状況を示しているのであろうが、ホトトギスの声はそんな生易しいものではない。昔からホトトギスは鳴いて血を吐くといわれている。その表現の由来は、鳴くときに見える口の中が赤いためであるが、鳴き声が、吐血を伴っているように聞こえるほどに激しいためでもある。その鳴き声は「帛（きぬ）を裂く」とも表現される。それこそ、裂帛の叫びなのである。

作者の佐佐木信綱は歌人、詩人であるとともに万葉集研究の大家で、東大の講師であった。なにしろ古典に対する知識は豊富であり、ウツギもホトトギスも実物をよく知らないで、机上の知識でこの歌をつくったのであろう（この詩の下敷きになった江戸時代の古い歌がある）。ウツギの花（卯の花）とホトトギス（時鳥）は伝統的に初夏を象徴する好一対の風物と見なされているので、「夏は来ぬ」を表すために、その二つを無理に同一の場所に位置づけ、事実に合わない情景を描いたのであろう。

よく知られているように、ホトトギスは託卵という習性をもち、主としてウグイスの巣に産卵する。他人に自分の卵をあたためさせ、雛を育てさせるのである。ホトトギスは仮親の巣に忍びこみ、1個の卵を嘴ではさんで抜き取り、その後に自らの卵を1個産む。卵の数の帳尻を合わせるのである。ホトトギスの卵は成鳥のサイズの割合には小さく、チョコレート色で、外見はウグイスの卵によく似ている。ホトトギスの雛は孵化後2～3日中に仮親の卵や雛を背中にのせて巣の外へ突き落とし、仮親からの哺育を独占する。

笠置にはウグイスはたくさんおり、春から夏にかけて、あちこちから一日中、鳴き声が聞こえてきて、うるさいほどである。ウグイスは、その季節に、なわばりをつくって生活する。わが家の周辺の地域では、それぞれの雄に対する区割りができあがっているようである。なわばりの面積は比較的小さく、家の周りのたくさんのウグイスがそれぞれのなわばりで鳴いているのを聞くと、なんだか衆議院の小選挙区制が連想される。

しかし、わが家の付近で鳴いているホトトギスは、たぶん、いつも1羽だけである。向こうの山で鳴いているときには、こちらの山では鳴かない。こちらの山で鳴いているときには、向こうの山では鳴かない。声の方向とその時間差から判断して、同じ個体が移動して鳴いているにちがいない。ホトトギスの雄もなわばりをつくるが、わが家の周辺の、かなり広い地域が1羽の雄によって占められているようである。

ホトトギスは通常の鳥と異なり、雌雄がつがいをつくらない。雄のなわばりの中に入ってきた雌は交尾をした後、雄と別れて単独で生活するという。わが家の周辺の地域を占拠している1羽の雄の元にやって来た雌は、1羽か、たかだか数羽であろう。しかし、同じ区域内に生息するウグイスは100羽を越えるであろう。したがって、ホトトギスは託卵の相手に不足しないはずである。この夏、ホトトギスはわが家の周囲で何個の卵を生んだのだろうか。何羽の雛が巣立ったのだろうか。そのために、ウグイスの卵と雛がいくつ犠牲になったのだろうか。

ホトトギス、カッコウ、ツツドリは同じ科（同じ属）に属し、互いに近縁で、いずれも託卵の習性をもっている。そして、いずれも胸から腹にかけて、白地に灰色の横縞がある。鷹斑（たかふ）という、この模様はワシやタカなどの猛禽類と共通した特徴である。猛禽類に襲われる小鳥は鷹斑におびえるというが、その特徴によって小鳥を脅迫することは、託卵の習性をもつこれらの鳥たちの生活にとって、どのような意味があるのだろうか。

最近、読んだ、W. H. ハドソン著『鳥たちをめぐる冒険』（講談社学術文庫）に託卵に関する面白い話があった。イギリスではカッコウはマキバタヒバリという小鳥に託卵する。ところが、マキバタヒバリの雌はカッコウが近づくと、そのあとを追って舞い上がり、一緒に飛んで行くという。1年か2年か前に自分の小さな胸であたため、餌を運んでやった大食漢の息子を、育ての親の彼女はまだ覚えており、カッコウがそばを通り過ぎるたびに、わが息子ではないかと後を追う。そして、身体のばかでかい、獣のような息子に変わらぬ愛情を告げるという。この本はイギリスの鳥たちの生態を面白く描いて読者を飽かせないが、感情移入が過ぎており、ほんとうかなと思う記述が散見される。

笠置の家でウグイスとホトトギスの鳴き声を聞きながら、ハドソンの影響を受けて、私も情緒的になる。哀れなのはウグイスである。大きさも見かけも自分とはまるで違う赤の他人の子どもを、なぜ判別できないのであろうか。自分とは似ても似つかぬ息子または娘を見て、これはおかしいぞ、だまされているのではないかと、なぜ感づかないのであろうか。雛はやがてホトトギスの本性を表し、胸や腹に鷹斑が現れてくる。ウグイスにとって、何よりもおぞましいはずの猛禽類の羽毛の模様が、わが子に出てくるのである。それを知ったときの親の心情はいかばかりであろうかと同情を禁じ得ない。

昔も、ホトトギスの鳴き声は、めったに聞くことができなかったし、その姿を見ることもごく稀であったはずである。人びとがその鳴き声、特にその初音を熱望したことは、多くの詩歌によって明らかである。「ほととぎすほととぎすとて寝入けり」（涼菟）という有名な句がある。作者（蕉門の俳人）はホトトギスの声を、いまか、いまかと待ちあぐねて、寝てしまったのである。江戸時代ばかりでなく、万葉の昔から古人はホトトギスの声を聞きたい、一声でいいから聞きたい、一声聞いたがもう一度聞きたいなどという、ホトトギスの鳴き声への願望を表した歌をたくさん残している。昔からホトトギスほど鳴き声を望まれた鳥はいない。ホトトギスの声は特徴的であるが、特に美しいとは思えないのに、なぜ、それほどの熱い思いを寄せたのだろうか。

「ほととぎす自由自在に聞く里は酒屋へ三里豆腐屋へ二里」（頭光）という、よく知られた狂歌がある。意味が分かりやすく、口調がよく、諧謔がきいており、江戸狂歌の名吟との評価を得ている。自由という近代的の概念をもつ言葉がすでに江戸時代に使われていた事実を知ることができるという副産物もある（もっとも、当時の「自由」の意味は現在のフリーダムとはかなり異なっている）。頭がはげていたために、そのペンネームをつけたのであろう、頭光（つむりのひかる）という名のこの狂歌師はホトトギスにこだわっていたようで、辞世の句は「ひと声は丸では聞かぬほととぎす半分夢の暁のころ」であった。明け方の、うとうととしたまどろみの中で、ホトトギスの声を聞いたような聞かないような夢うつつの状態をよんだものであろうが、私も笠置の家で同じような状況を何度も経験している。

昔から、ホトトギスの鳴き声を「自由自在に」聞くのは、よほどの田舎でなければならなかったようである。わが家の場合は、ＪＲ笠置駅の近くの食料品店に酒も豆腐も売っているが、その店へ行くには、徒歩で20分ほどかかる。奈良交通のバスが日に10便ほどあるが、それは停留所以外の場所でも乗り降りできる「自由乗降」の田舎のバスである。奈良行きのバスは「エリーゼのために」を、笠置行きは「峠のわが家」を鳴らして走る。音楽が聞こえてから道路へ走り出て、手を挙げて合図し、その場で乗ることができるのである。

最近、庭でマムシが見つかった。家の回りには雑草がぼうぼうと生い茂っている。夜は、窓の外の草むらにすだく虫の音がやかましいほどである。家の前のケヤキの高い梢をさわさわと秋の風が渡っている。家にはテレビもなく、新聞もなく、電話もない。玄関には、まだ表札さえもない。まるで隠者の生活であり、「酒屋へ三里、豆腐屋へ二里」の感が深い。

（生物学教室）

ハクビシンにご注意を

鳥居春己

ハクビシンという動物をご存知でしょうか。姿は足を短くして、尾を伸ばしたタヌキと思っていただければ当たらずとも遠からずであろう。鼻から額にかけて斑があるため、白鼻芯（ハクビシン）と呼ばれるのである。

国内では主に本州の北半分と四国に棲息し、最近になって北海道や九州でも記録されている。三重県では10年以上前に友人からハクビシンの交通事故死体を拾ったということを聞いたものの、それ以降は話が無いので紀伊半島にはまだ入り込んでいないのだろう。そのため知らない人が多くて当然。

ハクビシンの属するジャコウネコ科の動物は東南アジアやアフリカを中心に分布を広げ、ハクビシンも東南アジアから中国、台湾などに棲息している。日本のハクビシンはどうやら外国から入ってきた帰化動物らしい。東南アジアを起源とする南方系の種は中国大陸、台湾、九州を経て、本州や四国に分布しているのが普通である。ところがハクビシンが最初に記録された当時（昭和20年代）の分布域は四国、東北地方、東海地方の３ケ所に飛び飛びという不自然なものであった。また、ジャコウネコ科の化石は日本では発見されていない。それに、ハクビシンというのは人家周辺にハビタットを持ち、天井裏で出産するなど人間生活に異常なまでに入り込んでいる。タヌキなどより人家に依存して生活している。そんな動物が戦後まで人に知られずにいる訳がないというのが、帰化動物と考えられている理由である。

帰化動物というのは時として思いもかけないような大きな被害を与える。アメリカシロヒトリやアメリカザリガニを思い出してほしい。ハクビシンは人

ハクビシン

家に入り込んでくる。そこにはハクビシンの天敵となる動物はいないといえるだろう。

かつてハクビシンが有害駆除された理由は、ミカン、ブドウ、モモなど果樹の被害のためであった。ところが、近年は人家に入ってくるのを防ぐというのが主になっている。ロンドンではキツネが郊外に住み着き、アーバンフォックスと呼ばれ、ゴミ箱から餌を漁っていることが社会問題になっているが、ハクビシンもアーバンシベットと呼んでもいいかもしれない。また、カナダでは人家に住み着いたアライグマを駆除する会社さえあるという。

ハクビシンが紀伊半島に分布を広げていないなら、これからも侵入を阻止しようではないか。それは果樹の被害や人家の侵入を恐れるためだけではない。視点を変えてみると、野生動物も日本文化の形成の一翼を担ってきたのである。例えば、サル・カニ合戦ではサルは悪者であった。しかし改心している。このことは、日本人にとってサルは身近な動物で、いたずら者で、憎めない存在であったことを示すのである。昔話のタヌキやノウサギは日本人と野生動物とのつき合いを表現したものと理解できる。

奈良県は文化財の宝庫ともいえる。文化財を大事にしている奈良県にハクビシンはふさわしくない。周りの野生動物が帰化動物だらけになっては、日本人の友であった日本の野生動物は忘れられてしまう。野生動物の保護は日本文化の保護でもあるということを忘れないでほしい。

（自然環境教育センター）

赤谷演習林宿舎の思い出

梅　田　甲子郎

この度、附属農場と演習林を基幹として、奈良教育大学自然環境教育センターが設立されたことは、無用の長物として何となく邪魔物扱いにされていたこれらの施設が理想的な形に再編成されたわけで、本学にとって誠に喜ばしい限りである。ここに関係者各位のご努力に対し深い敬意を表するとともに、心より将来のご発展をお祈りする。私は演習林には直接の関係はなかったが、奈良教育大学に在職していた38年の間に、演習林宿舎を度々利用させていただいたので、宿舎のある川原樋川と赤谷付近一帯には様々な懐かしい思い出がある。次第におぼろげになりつつあるそれらの思い出を、年寄りの昔話として述べさせていただくことにする。

私が初めて演習林を訪れたのは今から42年前の昭和27年、まだ第二次世界大戦の戦後で奈良市内の3ケ所にアメリカ占領軍のキャンプが残っており、各家庭にはテレビも電気冷蔵庫も電気洗濯機もなく自家用車も極めて稀であり、教育大の前身、奈良学芸大学が設立されてから2、3年たった頃という昔の話である。学芸大に赴任して1年過ぎた私は、学芸大附属演習林が赤谷というところにあるのを知り、その地名の由来は我々が当時紀伊半島の地質の鍵層の一つとしていた赤色チャートにあるかも知れないと考え、それを確かめるため一度演習林を訪れたいと思っていた。たまたま、学芸大山岳部の学生諸君が、演習林宿舎をベースキャンプにし、赤谷を遡行して伯母子岳に登る計画であるとのことを聞き、渡りに舟とばかりに宿舎まで同行することになった。演習林宿舎へ行くには、奈良交通バス停の宇井でバスを降りて、川原樋川に沿った細い道を赤谷まで上り、そこで河原にある粗末な丸木橋で川を渡らねばならなかった。まさに赤谷宿舎は紀伊山脈の大自然のどまん中にぽつんとあるひなびた一軒屋といった風情であった。宿舎には電気はなく、石油ランプを利用していた。その薄暗い灯火は囲炉裏をかこんで夜遅くまで学生達と怪談に打ち興じるのに絶好の雰囲気を醸し出してくれた。また演習林には数人の人夫がいて、炭を焼いていた。当時は日本の暖房の主流が木炭であったからである。大学の研究室の暖房も火鉢のみであり、演習林で作った炭が配給されてきたが、時々、黒煙を上げて燃える炭も混じっていた。

翌日から付近を調べた結果、残念ながら目的としていた赤色チャートは赤谷の名の起源になるほどは

産出しないことが分かったが、その後も地質調査に時々この地を訪れることになった。さて、伯母子岳を目指して元気一杯で出発した山岳部の猛者連は、赤谷の余りの険しさに登頂を諦めて、夕方に意気消沈して下山してきた。紀伊山地の山々は絶壁が非常に多く、また山頂まで原始林に被われているため、名もなき山でも登頂が大変困難で危険なことが多い。彼等に引き返す勇気があってよかったというべきであろう。後日、私も5人と犬一匹のパーティを組み、赤谷を遡行したが、人ひとりがやっと通れるほどの道の至るところに絶壁があり、その絶壁に渡してある腐りかかった丸木橋を恐る恐る渡り、途中で野営をして、翌日やっと遡行を終えた。その時に出会った羚羊の勇姿や野猿の群れ、舌鼓を打った夕食の川魚、下山した時丸木橋が流失していたので川原樋川を泳いで渡ったことなどは未だ記憶に生々しい。しかし、赤谷はその後林道の開設のため切り刻まれて一変し、美しさと厳しさの共存していた往年の秘境の面影が追憶の中にのみしか残っていないのは、時の流れとはいえ一抹の寂しさを感じる。

その後も時々演習林宿舎にご厄介になったが、その中で忘れ得ぬ思い出がもう一つある。それは今から23年前の昭和46年のことである。教育大の地学教室では、毎年、4、5泊の地学野外実習を実施しているが、その年の実習は演習林宿舎を利用して、その周辺の地質を調べるということになった。この付近は比較的単調な地質であって、初心者の実習には適当ではないかもしれないが、雄大な自然に接することもできるし、また、非常に経済的であるからという訳である。西田史朗教授の綿密な計画に基づき、地学の新入生に上級生や卒業生が参加し、女性2名を含む20名近くの人数となった。それに、名古屋大学の故志井田功先生も合流されることになった。その頃は宿舎は以前よりは近代化されていて、電気も既に来ており、川原樋川には潜水橋（洪水のときには水面下に沈んで流失しないコンクリートの橋）もできていた。ところが、生憎、宿舎に到着する前からぽちぽち降ってきた雨が段々と激しい豪雨になってきた。初日は何とか外を歩いたが、次の日は川原樋川が増水して、潜水橋が水中に没し始めた。その時、ちょうど志井田先生が対岸に到着された。そして、ためらうことなくそのままザンブと川に飛び込み、右手にお土産の一升瓶を高々と揚げて腰の付近まで水に浸かりながら渡ってこられたが、その後の増水は極めて急激で、もう数分遅かったら、到底渡ることは不可能であっただろう。続いて様子を見にきてくれた宿舎の管理人が逆巻く濁流を見て処置なしと判断したのであろう、対岸から「水が引くまで動かずに待て」というような事を身振りで示してさっさと自宅に帰ってしまった。とうとう周りをぐるりと絶壁で取り囲まれている宿舎は文字通り陸の孤島になってしまい、その孤島に20名近くの人間がとり残されてしまった。それから何の目的もなく、することもない、ひたすら水の引くのを待つ集団生活が始まった。座談会やゲームなどもしてみたがそんなことばかりやっている訳にも行かず、とにかく退屈そのもの、食べるものはなんとかあったが、肝心の酒がなくなって寂しい限り。そして長い長い3日の後、ようやく水が引いて徒渉可能になったので、全員大喜びで宿舎を脱出した。結果としては心ならずも実習期間の大部分を、実習とは全く無関係な蟄居生活で潰してしまったが、大自然の迫力を身をもって感じ取ったことは決して無駄な体験ではなかったと思う。

この四半世紀における人類の自然破壊と環境汚染は人類の滅亡を予感させるほどの凄まじさであり、環境教育の重要性が叫ばれるのは至極当然のことである。しかしながら、人類は果たして破壊汚染の元凶である人口爆発と資源の浪費や豊かさへの欲求を押さえて、滅亡の危機を乗り越えるだけの賢明さをもっているだろうか。現代の人間社会の状況を見ると甚だ疑問に思われ、環境教育の困難さに絶望感さえ覚える。演習林宿舎を例にしても、40年前の不便な宿舎から、次第に電気がきて、道路が広げられ、鉄橋が架けられて便利に豪華になってきた。今では、車をデラックスな宿舎に横付けにでき、中ではテレビがみられるという状況である。つまり、近代物質文明の便利さは確保しておいて、自然の美しさのみを享受できるようになってきた。勿論、これは地球上全体の時の流れに沿ったまでのことである。しかしこの便利さを単純に賛美してよいものだろうか、この時の流れの落ち行く先はどこなのか。赤谷の今昔を振り返り、柄にもなく人類の行く末が気になった次第である。（1994年10月14日）

（名誉教授）

演習林の思い出

前田浩造

初めての出張

演習林についての思い出は、かなりあるが、初めて山に行ったときのことが、最も印象に残っている。それは、私がこの大学に勤めることになって初めての出張が演習林だったからである。

昭和25年、演習林に管理・実習用宿舎として200㎡ほどの建物ができた。この年の5月ごろ、林業科の学生が実習のため、現地へ行くことになり、それに合わせて、畳、厨房器具、寝具など搬入することと、帰途、大塔村坂本にある奈良地方法務局大塔出張所へ演習林の「地上権設定登記」の書類を持参、申請するため、学生と同行することになった。

トラック（当時のトラックは代燃車と呼ばれ、ガソリンの代わりに木炭か薪を燃料としていた）に宿舎用の荷物を積み、その上に私と学生十数人が乗り、指導のH先生は助手席へ。（今なら道交法違反で処罰かも）

五條までは、平坦でスムーズに走行したが、これから先は山岳地帯、馬力の出ない木炭車のこと、時々停止しては、エンジンを冷やし、ラジエーターに水を補給しながら、曲がりくねった山道を走る。天辻峠（今はトンネルがあって楽に通過できる）辺りでは、ゼイゼイと音ばかりで歩いた方がましのスピード。やっと難所を越したときには、一斉に歓声を上げたものだ。ここで遅い昼食をとり、あとは下り坂が多いので一気に演習林へ向かう。今では想像できないだろうが、早朝出発して宿舎に到達したのが夕刻だった。

何しろ、都会育ちの私は、こんな山深い所に来たのは初めての体験で、珍しいことばかり。宿舎は完成したといっても、山から引いた水は飲料水程度（貯水タンクはなかった）。向こう岸の民家の庭を借り、ドラム缶が浴槽で水は川から汲み、月を眺めながらの風流（？）な露天風呂を体験。壁は塗ったばかりで、乾いていない。もちろん電気もないので、持参したランプを灯して明かりとした。それでも、学生たちは、修学旅行の生徒のように、にぎやかに楽しくやっている。

一夜明けて、学生たちはH先生と山へ実習に行き、私は坂本の登記所まで出掛けるため、宿舎を出た。川原樋川沿いに宇井のバス停まで徒歩で約1時間ぐらい。途中、山仕事の村人や学校へ行く子供たちと行き交うが、冠りものを取り、丁寧におじぎをして「お早うございます」と挨拶してくれる。

街では、知らぬ人には声を掛けずに通り過ぎるのが当たりまえになっているので、大変驚いたり、恐縮した。後日、H先生に聞いた話では、この辺りの人は、ネクタイをした背広姿の人は、先生か役場の人ぐらいなもので、顔見知りでなくとも、必ず挨拶するのだとのことだった。しかし数年後、所用で再び演習林を訪れたが、この時は、街の人と変わりなかったので不思議に思った。理由として考えられたのは、この辺り一帯に電源開発の波が押し寄せ、ダム工事などで他府県から、どんどん労働者が入り込み、淳朴な風習が壊されたのではないだろうか。自然の破壊ばかりか、人の心まで変えてしまったのかと、むなしい気持ちだった。

宇井のバス停に着き、時刻表をみると、まだ、かなり待たねばならない。来るときは、トラック便乗だったので距離感がわからず、坂本までは、大した道のりではないだろうと歩いて行くことにした。これが間違いのもと、行けども歩けども、山道は曲がりくねって一向に、目的地が見えない。そのうち後ろから、路線バスがやって来た。私のそばで止まり「どこまで行かれますか」と聞いてくれた。「坂本まで」と言うと、まだかなり先だと言って乗せてくれた。この後も、手を上げたら、バス停でないところでも止めて客を乗せてくれるし、頼まれて小荷物を積み込んだりと、のんびりしたものだ。

坂本の集落の大半は、いま猿谷ダムの湖底に沈んでしまっており、ずっと上の方に住んでいた人たちが、残っているのみである。渇水期には、神社の鳥居など出現するのを見たことがある。

登記所に着き、書類を提出したところ、黙って内

容を見ていたが、そのうち「まだ不備な個所が、いくつかある。これでは受理できない。訂正個所には朱を入れて送り返す」とのこと。私が持参するまでにも、何度か書類が往復したそうだが、法的手続きに、うとい分教場職員のこと、なかなかスムーズに事が運ばない。

「こんな手続きは、司法書士に任せたら、一回でＯＫになるのだがなぁ」と登記所の人のつぶやきが聞こえた。しかし国の支出予算細目には、このような経費はないので致し方ない。その後、本部の会計課の人が、奈良地方法務局と交渉、手続きが済んだと伺った。

私も十数年経って国有財産の仕事をするようになり、法的なことを学んで、理解したが、このときは、子供の使いのようで、恥ずかしかったことを覚えている。

演習林は、その後500町歩のうち、175.9町歩ばかり、所有者から寄付を受け、今度は「所有権移転登記」をして、正式に大学の国有財産となった。

しかし、教員養成大学に演習林は必要ないと会計検査院の実地監査の都度、指摘され、大蔵省からは、農学部のある大学へ移管しては、と指示されたり、演習林に対する風あたりが強かった。

管理舎を建て替えて学生の合宿研修の場とか、生物科のフィールドの拠点にしたり、手放さないための努力も大変だったと思う。

この度「自然環境教育センター」が新設され、演習林も包括されると伺い、昔、関係した職員だった一人として、喜ばしく思いつつ、当時のことを思い出した次第である。

炭運びの思い出

いつ頃だったか、はっきりと覚えていないが、確か新制大学になって数年経ったときだったように思う。当時、私は会計課用度係に所属していたが、ある時期、附属演習林で生産された木炭を引き取りに行く仕事を命じられた。

この木炭は大学の各研究室、実習室などで暖房用に使うのと、教職員に販売（配給といっていた）する分として、年間200～300俵を現地の炭焼き窯で作っていた。

青年師範の林科の学生がいた頃は、炭窯造りや、炭焼きを実習の一環としてやっていた。しかし私が木炭を引き取りに行く頃は、林夫さんが一人で、演習林の管理とともに、こつこつと焼いていたように思う。

実験実習の結果、生産された物品は、生産品と名付けられ、売却して国の収入にしないと、予算配分に影響がある。演習林では、木炭のほか、除・間伐材、シイタケなども販売し、収入を計っていた。

トラックを雇い、人夫さんを使って運搬すれば簡単なことだが、経費の節約ということで、出入り業者（Ｈ衛生社）の作業車を安く借り受け、山好きの社長が好意で運転してくれることになり、Ｉ事務官と私の三人で早朝、大学を出発した。

朝から、うっとうしい曇り空だったが、途中から雨が降り出し、演習林に着く頃は、本降りとなってきた。初めの予定では、炭をトラックに積み込んだ後は、その日、演習林で一泊し翌日帰ることにしていた。しかし雨脚は激しくなるばかり。宿舎の前の川も増水、しかも上流の調整ダムから放水する気配になってきた。

今は演習林管理舎に通じるところに、営林署設置の立派な橋が架かっているが、当時は河原の中央部に流水橋（幅３㍍、長さ４㍍ぐらい、コンクリート製）があるだけ。水嵩が増えれば、橋は川の底で渡れなくなる。

昼食も、そこそこにして、管理舎そばの炭小屋から河原まで、約100㍍ほどの場所へ、一人、２俵ずつ担ぎ、次は向こう岸に止めてあるトラックの場所まで、川幅30㍍ほどを膝近くまでつかりながら運ぶ。

川の流れは、見た目よりも早く、川底の石に足をとられながら、汗だくで、必死になって運搬した。水嵩は次第に増え、150俵ほど運んだ頃には、水深が腰近くまでになり、とても炭を担いで渡ることはできなくなった。それどころか、我々三人も向こう岸へ渡るのが危なくなって、林夫さんの背中におぶさって一人ずつ渡してもらう羽目になった。

若い頃だったので、こんな重労働ができたのだが、それにしても、年老いた林夫さんの体力に遥かに及ばなかったのは、平素デスクワークで肉体労働をしていないせいだと、つくづく思い知らされた。

予定数量には足りなかったが、このような状況では仕方がない。雨はいっこうに止む気配がない。この時間（午後４時を過ぎていたと思う）から大学へ帰るのは、とても無理、途中崖地など危険箇所が、

いくつもあるので夜間走行はできない。演習林宿舎に泊まれないとなれば今夜の宿泊の場所を探さねばいけない。

とりあえず、十津川村の湯泉地温泉まで行けば、何とかなるだろうと、車を走らせた。

まだ相当の距離があるし、このままだと、木炭はずぶ濡れ、デコボコ道の振動で、コナゴナに割れると判断、途中の長殿という所で空き小屋を借り、一旦、炭を全部下ろした。ついでに炭で真っ黒になった体を、村営の露天風呂で洗い流し、再び湯泉地方面に向かった。

途中、雨が小止みになった頃、日衛生社の社長が「本宮の先に、湯峰温泉という鄙びたいい宿がある。前に一度行ったことがあるから、そこへ行こう」と言い出し、更に足を延ばすことにした。

ようやく目的の宿に着いたのは、午後7時過ぎ。川の中から湯が噴き出している珍しい露天風呂があった。早速、温泉で疲れた体を癒やし、その夜はぐっすり寝た。

翌朝、雨は、すっかり上がったが、旅館の人の話では、五條発の一番バスがまだ本宮に来ていないという知らせがあったと言う。

豪雨のあとは、落石や路肩の決壊で、道路が寸断されることが多いらしい。今日中に帰らないと大学の皆さんが心配するとわかっているが、電話も通じないので、連絡のしようがない。

ここから南下して、新宮市に出て海沿いに国道42号線で大回りする方法もあるが、この道路も、大雨で通行止めになる箇所が多いとか。どうしたものかと思案していたら、定時より約2時間おくれて、バスが本宮を通過したという知らせが入った。バスが通れるなら大丈夫と、来るときに通った国道168号線で帰ることにした。

予想していたことだが、途中、落石の除去作業のため、車を止められたり、山側から滝のように落ちる水の中を突っ走ったり、散々な目に遭いながら、平坦地の五條に着いたときの嬉しさは、口では言い表すことができないほど。

こんなハプニングがあったせいか、翌年からは、地元の森林組合のトラックに頼み、運搬してもらうようになった。

大学が、高畑町へ移ってからも、数年間、研究室の暖房は、この演習林の木炭であった。その後、石油ストーブ、電気ストーブが普及し、木炭にとって代わり、やがて今のような全館ボイラー暖房に移っていった。

先生方の中で、演習林生産の木炭暖房の恩恵に浴した方は、今では数少なくなったことだろう。戦後、復興途上にあった時代の懐かしい思い出である。

（元附属図書館事務長）

学内環境整備に思う

前田　喜四雄

今年（平成6年）は学内のあちこちで大工事がいくつも行われたし、まだ継続中のところもある。情報処理センターの建築、グラウンドやテニスコートの地面整備や夜間照明設置、附属小学校のプールの作り替えなど数え挙ればきりがない。全体的には大学のためによいことだが、これでよいのか？と気になることもいくつかある。

正門を入った正面の時計台がある場所の整備も徹底的に行われた。そこにはアラカシ、クスノキ、サクラ、マツ、イブキなど年月を経た樹木がたくさんあった。アカラシなどは根元、あるいは根元近くから何本も枝分れしており、それが一斉に地面近くまで枝を下げてまるで傘で地面を覆うように茂みを作っていた。また、それらの木にはツル性のツタ、ヘクソカズラ、ノブドウ、タンキリマメなどがたくさんまとわりつき、一層中を暗くしており、地面にはそれら各種の落ち葉がたくさん積もっていた。そして、その一角がイブキやヒラドツツジの生け垣で周りを取り囲まれていることもあって、そこは閉鎖空間のようになっていた。したがって、そこは人がスーッと入り込むにはどちらかというと躊躇するような場所となっていた。

しかし、それが幸いして、そこを多くの動物たちが利用していた。タヌキがよく隠れ込み、ため糞の山があったのもそこである。テンの糞を見つけたのもここであった。またその一角はいろいろな小鳥が周年よく利用していた。

ところが、根元近くから枝分れしていた多くの枝や地面近くまで下がっているアラカシなどの枝を春にまず切ってしまった。私の研究室の学生は学内の鳥の周年にわたる調査をしているが、ある日突然その林がすっきりとし、外からすけて中が見えるようになったために、鳥が寄りつかなくなったといって嘆いていた。多くの昆虫たちもここを利用し、また住んでいた。学内でスズムシのきれいな鳴き声が聞こえてくるのも唯一ここであった。

すなわち、そこにはいろいろな植物やそれが作りだす各種の環境があり、それをいろいろな動物が利用し、住み着いていたというように、このあたりの気候や土壌その他各種条件が自然に作りだした一級の自然地が残っている場所であった。そのような場所が、下の方についている木の枝や葉がすべて切り払われ、スカッと中が見渡せるようになり、下草や落ち葉もきれいに片付けられ、かわりに全面芝生で覆われ、中を石やコンクリートブロックでできた散策路が十文字に走るように生まれ変わった。これは日本の気候条件のそれでなく、まるで雨が少なく冷涼な気候をもつ地域の景観のようである。この景観をいつまで保つことができるか知らないが、いずれにしてもこれを維持するのに人の手による相当の手間がかかるにちがいない。

いずれにしても、これではタヌキはもうここで休息しないだろうし、ため糞はしないだろう。また、ここのスズムシはこの工事でどうなったのだろう。近くに逃げ込んで生き延びていてくれると嬉しいのだが、その保証はない。来秋に学内でスズムシの美しい鳴き声を聞くことができるのであろうか。

最近は環境教育が特に重要視されるようになり、平成3年に「環境教育指導資料」中・高校編が、平成4年には小学校編が文部省より出されるという現状である。このようなこともあって、本学に自然環境教育センターが設置されることになったと思われる。しかし、この環境教育や自然環境教育は実習林や実習園に行き、何かイベント的なことを一時に行えば、それで事足りるというものでない。常日頃の多方面からの絶えまない教育こそが学生にとって必要なのである。こういう意味からして、本学構内で自然環境教育を行うのがもっとも必要なのであり、効果的でもある。

したがって、学生が常日頃見聞き、そして接することができる本学構内のいろいろな環境や自然環境を教育用に整え、そして利用するのは大変大切なことである。したがって、今回の時計台のある一角の環境改変は上等な自然の消失をまねき、大変残念なことである。

見方をかえよう。この改変によって学生が常にそこに集まり、そして語らい、いろんな議論をすることに使われ、学内が学生によって常に賑やかになり、結果として学生が各種のことに積極的に取り組むようになるのなら、大変よいことではある。もしこうなるのなら、限りがある狭い学内でとりあえずどちらを優先するかということになり、まだ今回の改変は納得がいく。

最近、同じような景観をもつ場所を生協と学生会館の間、および正門を入った右手、すなわち学生会館の東にも作りだした。これらの環境改変によって、何が変ったのだろうか。確かに一見する見栄えは変った。しかし、それによってそこを利用する学生や教官の数は増えたのであろうか。おそらく以前とあまり変化がないのではなかろうか。そうだとすると、残念ながらこの時計台の場所の改変によっても学生がここに集まりつどうという希望的観測は私には当たらないような気がするが、どうだろうか？

このように予測されていなかった、あるいは今後実際にはこのようにならなかったなら、いったい今回の改変は何だったのだろう。単に学内の景観を若干見栄えよくしたということだけであって、失ったものの方が圧倒的に大きいのではないだろうか。しかも、その改変もいつまでその景観を維持できるかを考えるとさらに疑問である。

ついでにつけ加えておく。正門のそばに、マテバシイというドングリの実る木があった。学内で唯一の木であり、毎年ドングリが実っていた。このドングリはシイのように食べれるドングリで、しかもシイよりも粒が大きく食べでがある。毎年、これを授業に利用していた。これがある日気がつくと、切り倒されてバイク置き場になっていた。この木が学内のどこかに移植されているかもしれないと思い探し

たが、見つかっていない。

また、学内でヒラドツツジにジネンジョ（ヤマノイモ）がからみついて生えている場所があった。毎秋そこでムカゴを拾い授業で使っていた。その場所のヒラドツツジもすべて掘り起こされて、その場所はコンクリートブロックの地面に変ってしまった。

大学構内で自然環境教育、理科教育、生物学教育に利用できる、また利用している環境や場所がまだいくつもある。大学構内の環境改変にはこのようなことに対する配慮もかならず頭にいれて欲しい。

今回の学内の環境整備でいろいろな植木が新たに植えられた。学生の教育面から考えると、残しておいて欲しい木や環境があるし、どうせ植えるならこれが欲しいという木もある。何のための環境整備かを考えて、もう少し植える木に気を配って欲しいものである。　（自然環境教育センター）

奈良学芸大学八木分教場の事務職員の写真

前田浩造

撮影年　昭和25年ごろ

撮影場所　八木分教場玄関前（現在の橿原市立体育館駐車場辺り）

（写真の右側には「奈良青年師範學校」、左側には「奈良学藝大学八木校舎」の看板がかかっている。何のときに写したのか記憶がないが、国旗が掲げられているところをみると、青年師範学校の最後の卒業式のあとでは？正面右側が分教場主任室、左側が事務室）

人物紹介

〔前列右側より〕

福本　実（故人）　当時、事務室主任。その後、本部学生課、附属図書館事務長で退官。

中森英太郎（故人）　職業第一講座（作物学）助教授。事務の統括をしていた。

宮本睦治（故人）　旧青年師範学校校長。このと

き「職業指導」科教授、兼八木分教場主任。

土井　実　小生が分教場に採用されたときは大学の会計課にいたが、その後退職したとか（面識なし）。

春田実次　青年師範当時会計担当、大学になって会計課出納係長、のち他大学へ転出。大阪大学附属病院管理課長で退官（現在、佐賀市在住）。

瀬川敏夫（故人）　元小学校校長。当時は図書係をしていた。その後、本部教務係長で退職。

〔後列右側より〕

村田鹿之助　分教場→八木附属農場→学生課→奈良工専学生課長補佐で退官（高市郡明日香村在住）。

前田浩造（小生）　当時、会計課→附属図書館事務長で退官。

上田？　当時、会計係員をしていたが1年ほどで退職（消息不明）。

柳田一良（故人）　分教場用務員。大学で定年まで在職。

丸山　崇　林業科の副手として2年ほど勤務ののち県林務部に転出。

植田登志子（故人）　分教場で教務係、のち本部会計課。定年を待たず退職。

竹中康子　分教場用務員から附属小学校の給食婦として退職まで務める（橿原市在住）。

池口喜隆　分教場で教務係、のち大学で学生課係長。途中退職（消息不明）。

前田里代（小生の家内）　当時、厚生係

井上勇作　当時、教務係→附小事務係で退職。

中谷ミサオ（故人）　分教場用務員。のち退職。

このほか、写真に写っていないが庶務係女子3人、会計係2人、農夫4人がおられた。

（元附属図書館事務長）

奥吉野実習林の自然観察データマップ

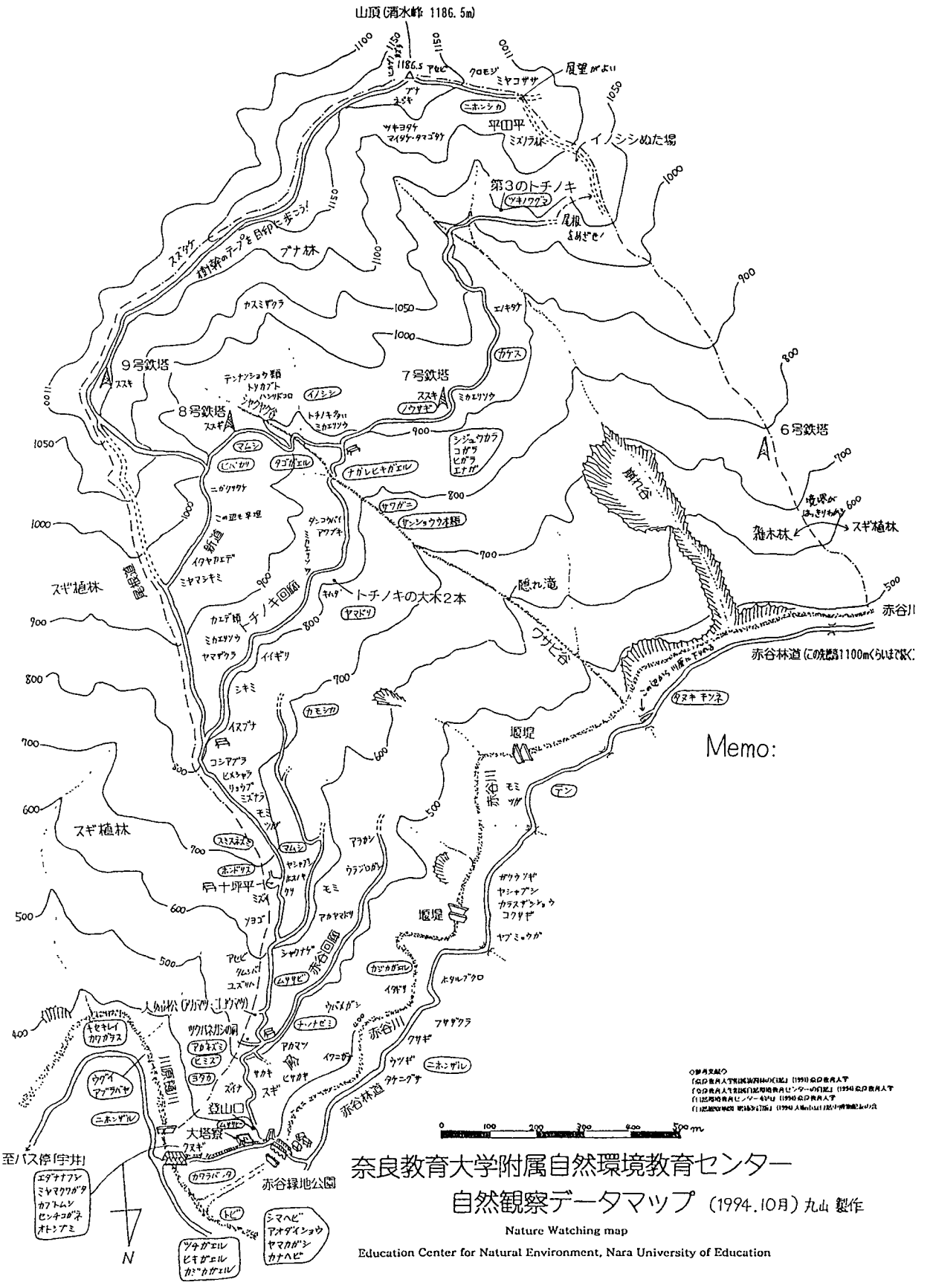
丸　山健一郎

実習林の自然を楽しむための自然観察地図を作ってみました。細かい文字がいっぱいでちょっと見にくいかも知れませんが、実習林を利用する方はお試しください。この地図は標高の高い方を上にして描いてあるので、南が上になっています。

実習林は大塔村と十津川村との境目にあります。遠いように感じますが、大学から車で2時間半くらいで到着します。実習林にはブナ林をはじめ、いろいろな種類の植物が見られる林があります。マイタケやエノキタケなどのキノコ類もたくさん見られます。動物もシカやイノシシ、リスやムササビ、タヌキやキツネ、トカゲやマムシ、カエルやサンショウウオのなかま、ウグイやアブラハヤなどの魚類、クワガタムシやチョウなどの昆虫類ほか、じつにいろいろな生き物が棲んでいます。それらが実習林のどこで見られるのか、だいたいの場所を書き込んであります。植物は動かないので、地図に示した場所に行けば、見ることができるでしょう。哺乳動物など警戒心の強い動物には、なかなか出会いません。見たい人は、少人数で静かに登山することをお勧めします。

実習林の登山道は最初がかなりの急傾斜です。スギやヒノキの植林の中をジグザグに登っていきますが、標高600メートルあたりまではしんどいと思います。ぜひ、このしんどい道を登りきってください。そしてトチノキ回廊にある県下一と言われるトチノキ巨木やシャクヤク沢の清流、平田平のミズナラの林などを訪れてみてほしいと思います。

もっと詳しく知りたい方は「自然環境教育センターの自然」(1994)をご覧ください。なお、この地図は、卒業生の浅見卓さんが1992年に作られたものを参考にさせていただきました。　（生物学教室）


山頂(酒水峰 1186.5m)
1186.5
展望がよい
ニホンシカ
平田平
イノシシぬた場
第3のトチノキ
ブナ林
9号鉄塔
7号鉄塔
8号鉄塔
6号鉄塔
スギ植林
トチノキの大木2本
隠れ滝
雑木林
赤谷川
赤谷林道
堰堤
十坪平
登山口
大塔寮
赤谷緑地公園
至バス停「宇井」
N
Memo:
奈良教育大学附属自然環境教育センター
自然観察データマップ（1994.10月）丸山 製作
Nature Watching map
Education Center for Natural Environment, Nara University of Education

自然環境教育センターの名称

北川尚史

自然環境教育センターの正式な名称は奈良教育大学教育学部附属自然環境教育センターである。附属幼稚園、附属小学校、附属中学校なども正式には奈良教育大学教育学部附属であるが、附属図書館や保健管理センターは奈良教育大学附属である。なぜそうなったのか、大学附属と学部附属とでは、何がどう違うのか、私は事務局に何度も質問して説明を受けたが、いまだに釈然としない。本学のような単科大学の場合、両者は実質的に同じだと思うが、とにかく、制度上そうなっている。

自然環境教育センターの名称は文部省との折衝の過程で決まったものである。かつての附属農場演習林運営委員会は平成元年の概算要求を出して以来、この施設に対していくつもの名称を使ってきた。今回の概算要求も当初は自然教育センターであった。しかし、環境問題が社会的に大きくクローズアップされ、学校教育でも重視されるようになったため、環境という名を表に出した方が概算要求を通しやすいという判断から最終的に現在の名前になった。なお、新聞などで附属はしばしば付属と書かれるが、正式には附属である。日本国憲法が付ではなく附を使っているので、国立の附属機関はすべて附属を使うことになったと何かで読んだ記憶がある。

奈良教育大学教育学部附属教育実践研究指導センターの名称は、長くて覚えにくく、適切とは思えない。センターはともかく、教育、実践、研究、指導という類似の概念が四つも並んでいるため、その順序が頭の中で混乱してしまう。覚えていても、考えながらでないと言えない。すらっと口をついて出ないのである。学内の教職員や学生でいったい何人が、その長い名前を知っているであろうか。私は身近な人たちに試してみたが、誰一人として正確に言える者はいなかった。同センターの直接の関係者以外は、ほとんど誰も覚えていないのではあるまいか。まして、学外者が覚えてくれることは、まったく期待できない。

覚えられない名前は意味がない。しかも、教育実践研究指導センターとたくさんの言葉を並べても、内容が正確に伝わるわけではない。教育を実践し研究し指導するのか、教育の実践を研究し指導するのか、教育の実践の研究を指導するのか、これでは分かりはしない（同センター規則を見ると2番目が正しいことが分かる）。この名称は、すでに他大学にある同種のセンターに統一されているのであり、名前の欠陥は本学の責任ではない。そのような長くて覚えにくい名前を最初に認可し、それを普及しようとしている文部省が悪いのである。

教育実践研究指導センターほどではないが、自然環境教育センターも長すぎる。設立後まだ日が浅いせいもあるが、私の経験では、本学のスタッフでも正確に呼べる人は少ない。環境ブームの時流に乗るための止むを得ない措置であったが、ほんとうは「環境」がない方がすっきりする。センターの名称に環境の文字がないからといって、けっして環境をおろそかにするわけではない。

名前はできるだけ簡潔で覚えやすい方がよい。しかし、正式に名前をつけてしまった以上、いまさら変更することはできないので、この問題は通称名で対応すればよい。通称名は「自然教育センター」が望ましいが、それでもまだ長くて覚えにくければ、「自然センター」でもよいと思う。（生物学教室）

編集後記　本年6月24日に、待望の自然環境教育センターが発足しました。それに伴って、旧附属農場と旧附属演習林は、それぞれ、同センターの奈良実習園、奥吉野実習林となりました。本誌『自然と教育』は従来、附属農場・演習林が発行していましたが、自然環境教育センターが引き継いで、今後も発行することになりました。これを機会に、A4版のサイズにし、雑誌のスタイルを少し変えました。

本号も、たくさんの原稿が集まり、面白い内容になりました。旧演習林に関する思い出は年配の教職員や古い卒業生たちにとっては懐かしい記事でしょう。『奈良教育大学史』（平成2年）には附属農場や附属演習林の歴史が欠けています。自然環境教育センターの前史を、いまのうちにできるだけ明らかにしておく必要があります。ついては、旧農場や旧演習林に関する古い資料を集めようと思っていますので、よろしくお願いいたします。（北川）